

報告者：百田清美（NPO法人ねばぁらんど 理事長）

地域協同推進フォーラム～広げよう支えあい、つなごう地域の力

2005.2.10（木）10:00～16:00@大手町JAホール

地域協同推進フォーラム実行委員会

（財）さわやか福祉財団

（社福）全国社会福祉協議会

全国農業協同組合中央会

日本生活協同組合連合会

基調講演『安心して暮らせる地域（まち）づくりへ』

～ネットワークのすすめ～ さわやか福祉財団 理事長 堀田 力氏

介護保険について

- ・介護保険の必要性を国会議員に訴えた時、保守革新問わず「介護は妻・嫁の仕事」と聞く耳を持たなかった。「では議員が亡くなった後の妻の介護は？」と重ねて尋ねると無言。
- ・傍らで聞いていた議員の妻たちが、理解を示してくれて制度ができたと思う。
- ・介護保険という基礎の制度ができたことで、私達は心の交流（墓参りしたい、音楽会に行きたい）を中心とした支援に力を入れられるようになった。
- ・身体 企業・事業所 = 介護保険の枠内
心 ボランティア = 同 枠外 > ネットワーク・協同で対応可能

福祉について

- ・福祉が進歩していることを実感している。その原動力は「心」もっと幸せになって欲しいと願う気持ち。尊重する気持ち。『尊厳』
- ・従来は憲法25条生存権に根拠をおく保障 = 与える福祉。
これからは、憲法13条個人の尊重に根拠をおく保障。私達はこれを追求できるようになってきた。
- ・「尊厳」を実現するには一つの機関（行政も）では無理。
謙虚に自分の活動だけでは実現できないことを知り、ネットワークを組んでサービスを提供する。
- ・トータルな福祉（幸せ）サービスには、ネットワークが不可欠。
- ・法研「2015年の高齢者介護」高齢者介護研究会編 2003年6月刊

現場から見えてくること～事例より～

【娘が認知症の父を介護】

- ・娘の顔もわからない父が、おむつ交換の時暴れることがある。その原因は彼女自身にあった。「替えてあげようね」と言うと暴れる。「替えようね」では

暴れない。娘の「あげる」という言葉に反応していた。認知症の人にも尊厳はある。「自尊心」はある。

【三重県：認知症高齢者&学童統合施設】

- ・元は高齢者施設。自主運営の学童クラブで子ども達が荒れていた。そこで1階をクラブ、2階を高齢者の統合施設にして運営を引き受けた。
- ・高齢者は、見ているうちに放っておけなくなり手も出し口も出すように。係わる中で役割を得た。
- ・怒る専門のおばあちゃん。気合い入っているから子ども達もびびる。
- ・宿題をしているか見張るおばあちゃん。実は目が不自由。
- ・宿題ができたならシールを貼るおばあちゃん。それまでは自分のおむつをちぎって散らかしていた。
- ・自分の子どもの名前は忘れても、クラブの子どもの名前は覚える。

ネットワークの必要性

【今まで】サービスを提供する側でネットワーク。「こう支援します。」

【これから】助ける方も助けられる方もない、入り交じるネットワーク。ごちゃごちゃシステム。どうネットワークをするかを議論する必要はない。交じり合う場を作れば、自然にネットワークはできる。

- ・働くサラリーマンにも心の支援が必要。一番「助けて」と言えない人たち。行政も。上司に叱られ家族に弱みを見せられず、能力以上の見栄を張る。
- ・自殺遺児を支えるレインボーハウスを見ると、親の自殺は子どもに対する最大の暴力だと思う。

ネットワークをどう結ぶか

【大切なのは意識】意識が変われば自然に行動も変わる。

- ・セクショナリズムを脱すること。
- ・何のためにこの活動があるのか、を常に自分に問う。自分の活動の位置づけ。
- ・相手を幸せにするための「一部」の仕事をしているだけだと謙虚に考える。

1. 個別のネットを活用して、探し、依頼する。
2. 集まる。知り合うだけで情報を共有できる。
3. 行政とどう協力するか。
 - ・行政のNPOに対する評価はいろいろ。×手足になりなさい。×プライド高く言うこと聞かない。すぐ動いてくれる。
 - ・NPOの姿勢もいろいろ。×市民活動にお金出して当たり前。上手に立てながら行政を教育するつもり。異動があればまた1から。感情より使命を優先。

事例報告『地域支え合いの現場から』～現状とネットワークへの取り組み～

助け合い活動から支え合いの地域づくりへ「うちの実家」代表 河田瑠子
大阪府社会福祉事業団、(財)新潟市福祉公社勤務。

J Aの助け合い組織の今後の取り組み～心と心が通じ合う活動のために～

J A高齢者福祉ネットワーク アドバイザー 船木 八重子

インフォーマルサービスとの連携で成り立つケアプランの実例

みやぎ生協 ケアマネージャー 棚木 裕子

住みよい街づくりを目指して！

ゆう葛城 乾 沙久子・村瀬 雅恵(葛城町福祉推進委員会推進委員)

パネルディスカッション『地域ネットワークをどうつくるか』

コーディネーター 桃山学院大学 上野谷 加代子 教授 いいっ！

パネリスト 事例報告者

事例報告を聞いて

- ・ 全員女性！
- ・ 「志の高さ」に敬服。
- ・ パワーはつながる。金や物ではなく、「心」と「技」でつながる。
- ・ プロセスが大切。感じたことから始める。まず自分が動く。謙虚。
- ・ 協同の見え方が素敵に変わった。

切実な思いがきっかけだったと思うが？

- ・ 人と話すのが大好き。電話で拒否されたら、会ってみよう！と考える。
- ・ J Aの看板が大きいので助かった。
- ・ 男は地域に戻れない。お茶も飲まない。散歩もしない。動く手足があるのに家事をしない。
- ・ 妻が入院した高齢者世帯。近所の人や遠くにいる娘に電話。「何もできないお父さんがひとりでもし火事を出したら困る。世話にこい。」
介護保険ではできないが、生活援助した。それをご近所に告知。近所の人
も安心したら、「時々声かけます」と協力的に。
- ・ 本人の問題を解決すると言うことは、回りの問題を解決すること。
- ・ 目立たない！ 助けられ上手にならな！

苦労したところは？

- ・ 時代が変わったことを消化できない人たちに「家庭の問題は社会の問題」ということを理解してもらうのに時間がかかった。

- ・自分の家だけは万全なので介護サービスなんて不要。「誰に看てもらいたい？」
「妻」「奥さんが先に倒れたら？」「娘」「でも遠くに嫁いでますよね。」
- ・具体的に身近な問題として語ったらわかってくれた。「スエーデンでは...」と言っても落ちない。賢い人ほどわからないのが不思議。
- ・どこかに「良い嫁」をしたがる自分がいる。
- ・仕事のできないケアマネ=人の話を聞かない。おしつけがましい。
介護内容を決めるのは本人。自分で決めたことしか受け入れない。本人中心主義。話のペースを崩さないで2時間でも話を聞かないと仕事をもらえない。
- ・ひとりで生きているわけではない。本人が気付いていないネットワークがある。それを掘り起こし、つなぐ。
- ・男性は受け入れるのに時間がかかる。
- ・「困難ケース」という表現をよく使うが、提供者が自分の未熟さを棚に上げて
いる。ヒューマン・サービスに係わる者が「困難」と言うのはおかしい。
- ・福祉文化の構築、というかイメージの固定化を払拭するのがたいへん。福祉は年寄り向けだけではない。
- ・その人にとって困っていることがあったら、はたから見れば困らないことでもそれを取り除く。「庭の柿の実をとってほしい。」「そんなのカラスに食べさせればいいのに。」ではすまない。庭を見るたびその人は気になる。困る。
- ・「得意」というのは資格はいらぬ。里芋むいても手がかゆくならない、というのも特技。良かった探し。良かったを集める。

行政との付き合いは？

- ・行政マンもきっと個人的にはやりたくてもできないんだろうと理解する。
- ・行政と民間「持ち場」があることをわきまえて、そこをきっちり担う。
- ・ニーズの顕在化。データ化で実践を示す。伝える。
- ・行政がダメ、ではなく、思いで動ける私達にできることがある。
- ・文句を言う前に足を運ぶ！

最後にひとこと。

- ・伝統的な組織で古いところだが、だからこそいろいろな人がいることを見過ぎさない。
- ・めざすイメージをみんなで共有してきたから今日がある。たとえば実費負担。趣旨と違うから無償で長く続けるためにも実費位はほしい。
いったん受け取って、その分を組織に寄付することで、双方の思いはかなう。
- ・もし、万が一、だけを考えると無理になる。思いに立ち返る。やってみてわかることが多い。
- ・顔の見える範囲が基本。
- ・柔軟性。補助金が3年しかもらえない、ではなく、3年したらその時考える。
- ・新しいサービスから新しいつながりが生まれ、それが政策への働きかけになる。